

春眠暁を覚えず

陸奥

あるうららかな春の朝。女子高生の二人、椎奈と霧子は共に登校への道を歩いていた。途端、温かな春風が吹く。ふわりと彼女らの髪とスカートが風に踊る。しかし彼女らは平然としている。風に遊ばれて、桜の花びらが舞い散る。それらを眺めながら椎奈が口を開いた。

「春だねえ」

「春だねえ」

鸚鵡返しで霧子が眠たげに答える。次の瞬間、二人は同時に大きな欠伸をした。

「まったくもって春だねえ」

本当にうららかな春の日である。春眠は暁を覚えないというが、それはこの麗らかな女子高生二人にも言えることだった。

「あ！」

霧子が何かに気づいたように声を発した。

「なんだ？」

「わたし、スミレ好きなんだよねー」

霧子は道端に咲いている小さな青い花をさしてそう言っているらしい。しかし椎奈はその光景をほほえましいと思うよりも前に、滑稽だと思った。なぜかというとな...

「あんたそりゃ、スミレじゃないよ」

「え！うそ！」

「ほんとのほんと」

「じゃ、わたしがスミレだと思っていたこの花はなんなのだ」

「オオイヌノフグリ」

「おおいぬのふぐり？」

「おおきな犬のキンタマって意味」

「どひゃー！！」

霧子は大仰に驚いて見せる。そして椎奈にもう一度尋ねる。

「もう一度、お聞かせ願おう」

「おおきないぬの...きんたま！！」

「どひゃー！！」

大仰なことこの上ないわけである。この戯れは、つまり彼女らのブームなわけであった。日常の些細なことを、ちょっと歌舞伎調に表現する。若気の至りとはこのことを言うのだろう。しかしそんなことは彼女らにとってはどうでもよいことであった。大概、歴史的に、高校生というのは楽しいことが大好きな人種なのである。ちなみにほんとのほんとに、道端の小さな可憐な青い花は、過去オオイヌノフグリという不憫な名前を賜ったのであった。嘆かわしい。ような、ないような。

二人は最寄りの駅に着いた。当然、いつものように電車を待つ。この分なら遅刻をしないですむだろう。春眠は彼女らの出席単位を脅かすことまではできなかったようである。その点、彼女らのうちの一人は冬の朝には弱いようである。彼女はそれをして、

「冬眠は暁を覚えず。という諺があってもいいと思うのだよねえ」

と級友に洩らすのだった。霧子である。それを聞いた椎奈は思った。そして言った。

「お前、去年も同じこと言っていたぞ」

「あらま。そうなの」

霧子らしいと、椎奈は思ったのである。しきりに思ったのである。

駅で電車を待っていると、椎奈の目線がある男子高校生の姿にとまった。

「あ、霧子。あっちいこう」

「え、なんで」

「なんでも」

彼女らは男子高校生と少し距離をとるように、場所を移動した。当然、霧子は疑問に思うはずであった。そして彼女は素直に椎奈に尋ねた。

「なんで移動したんだよ」

「いやー、それがね」

椎奈は霧子に述懐した。つまるところ、椎奈はあの男子高校生と顔を合わせるのが気まずいということだった。なぜかというと、彼女と男子高校生は過去、ある行き違いをしたそうなのである。どんな行き違いがあったかということ、椎奈は口をつぐんだ。霧子は深くは詮索しまいと思った。その時、彼女は「自分はひとつ大人になったぞ」と思ったが、実のところその発想こそ、子供のそれだった。

○

学校に着いた彼女らはいつも通りに授業を受け、やがて昼休憩の時間を迎えた。半ドンの鐘が鳴る。キーンコーンカーンコーン。椎奈のすぐ後ろの席に座っている霧子がいの一歩に口を開いた。

「だー！つかれたー」

「昼飯食って補給しろ」

霧子には補給が必要なようである。補給しろ霧子。昼飯を食え霧子。

二人は昼飯を食う。その途中、椎奈が思いついたように口を開いた。

「そういえばお前、なんであれをスマレだと思った」

「え？んあ？」

「あー。もう忘れてる」

霧子は今朝のことをしっかり、いや、すっかり失念しているようであった。椎奈はなおも今朝の一件が頭から離れなかったので霧子に尋ねた。

「今朝のことだよ。オオイヌノフグリをスマレだと勘違いしていただろう？」

「ああ。あれね。どうしてだろう」

「どうしてだかわからんのか」

「どうしてだろね」

「やれやれ。そんなんじゃ先が危ぶまれるな」

「なんだ？」

「私たちも来年には受験生だ。記憶力が怪しいようじゃ、受験に差し支える」

「はうー」

霧子はうなだれてしまった。そう、彼女らは現在高校二年生。まだ4月とはいえ、いずれ6月頃には文系か理系か決めねばならぬし、一年というのは彼女らが思うほど長くはない。あっという間に彼女らは来年、受験生になってしまうのだ。ちょっと賢い椎奈にはそれがわかっていた。霧子にはわかっていないようである。ああ、若いというのはいいものだ。

○

二人は学校の帰り。帰途にあった。家路へつづく道を彼女らは行く。霧子がはっと気がついたように声を出した。

「あ！花が閉じてる」

椎奈が道端の花に目をやると、花卉はしっかりと口を閉じていた。

「そうだよ。普通、花は日が落ちると花びらを閉じるんだ」

「そうだったんだ！知らなかった」

「お前、どんだけだよ」

椎奈は霧子に突っ込みを入れた。彼女らの夕方の時間はこうやって平和に過ぎていく。オオイヌノフグリはしっかりとその身をつぐんでいた。

○

「わかったよ！」

次の日の朝。登校の道すがら、霧子が椎奈に言った。

「なにが？」

「あー。もう忘れてる」

椎奈は昨日のことをすっかり忘れていたらしい。霧子は目ざとくその点を指摘したのだ。昨日の仕返しのつもりだった。

「昨日のことだよ。わたしの勘違いのはなし。花の」

「ああ。あのオオイヌノフグリの」

「そう！犬のきんたま！」

「いい年した女子高校生が、そんな言葉、安易に口にするもんじゃありません」

椎奈が霧子の言葉を制した。しかし昨日、椎奈も嬉々としてその言葉を口にしてはいたはずであった。まことに嬉々とした表情で口にしてはいたはずであった。しかしそんなこと椎奈にとってはどうでもいいことなのであった。女子高校生とは刹那的な楽しみを享受する生物なのだ。椎奈が霧子に尋ねる。

「それで、どういうわけだったんだ？」

「それがね」

霧子の話はこうだったことであつた。彼女は小さいころ、花の名前なんていちいち気にしない子供だった。道端に可憐な花が咲いていれば「きれいだなー」くらいしか思わなかった。

そんな彼女だが、小さい頃は近所の子供たちとよく外で遊んだ。子供が外で遊ぶといったら、なんといってもメインは公園である。彼女もご多分に漏れずに公園で友達とよく遊んだ。その公園が「すみれ公園」と呼ばれていたそうである。

しかし昨日、夕飯の買い出しの帰り、彼女がその公園を訪れてみると妙なことに気づく。その公園の名は「大貫谷公園」であつたのだ。

なぜ？...彼女は考えた。そうか、きっと「すみれ公園」というのは俗称だったのだ。周りにスマレが咲いていたから、みんなはきっと「すみれ公園」と呼んでいたのだ。でも、それと同時にオオイヌノフグリも公園の周りに群生していたんだ。だから、わたしはスマレをオオイヌノフグリだと勘違いしたんだ。

「と、いうわけだよ」

彼女の述懐を聞いた椎奈はうねった。

「ふーん。なるほどねー」

椎奈は霧子の説に納得がいったようだった。

「しかし時代は巡るものだねー。夕方の公園を眺めていると諸行無常を感じたよ」

霧子は感慨深そうにそうつぶやいた。椎奈がそれに反応して霧子に尋ねる。

「なにがどうしたっていうんだ」

「遊具がなんか、丸っこくなつた」

「まるっこく？」

「そう。なんというか...角が落ちた。というか」

ああ。そうか。椎奈は納得した。

最近になって、公園の遊具はなにかと危険だという理由であろう、ジャングルジムや独特の形をしたブランコが近所の公園から姿を消していた。そのことを、なんとなく椎奈も感じていた。そして、なんとなく「さびしい」と思っていた。そう思った次の瞬間「しかたがないだろ。時代

の流れだ」心の中でつぶやいていた。椎奈はあの有名な句を口にする。

「鴨長明も言っていた。ゆく川の流れば絶えずして…」

「しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし」

霧子は椎奈の言葉に連ねて言った。霧子は古典好きだ。

「その通り」

椎奈は言った。

○

「そういえば」

椎奈は自室で一人つぶやいた。温かい春の夜。夕飯のおかずはさばの味噌煮だった。

はずれ。椎奈はそう思ったが、もちろん口にはしなかった。今日はなんだか肉が食べたかった。だけど、そんなこと考えたって仕方がない。弟の純はおいしそうにさばを食べていた。それならば、私も…と、思ったが、別の考えが彼女の脳裏をかすめていた。

「そういえば、あの日も、こんなような日だったっけ」

彼女はなおも自室で一人つぶやいた。世界史の宿題を目の前にして。

○

歴史の教科書とにらめっこしながら小学6年生の椎奈は思案していた。

行くべきか行かざるべきか…。

四月の始まりにしては、存外温かい日。まさに春の訪れをしらせるようなそんな日の夕方に椎奈は自室で懸命に考えていた。今日が約束の日。場所は「すみれ公園」。

ああ。よくわからんけど、一緒によく遊んだあの公園のことか。そう椎奈は考えた。

彼女はよく考えたあげく、行くことに決めた。

「怖いけど」

自分の気持ちを相手に告げるために。

彼女は行った。「あの公園」に。しかし彼はいなかった。

ほっとした。

私は時間通りに来た。約束は守った。これで終わりでもいいよね？

若干辺りを気にしながら、椎名は家路についた。胸を撫で下ろしながら、表現のしようのない後悔にも似た感情を抱えながら。「ごめんね」一応、そうつぶやいておいた。誰が聞くこともない。

帰った彼女は、誰が添削するわけでもない歴史の問題を一心不乱に解いていた。それはもうがむしやらに解いていた。私は天才かって思うくらい。

それで気持ちがすむなら、気のすむままに....

○

「私な、私...あんたのことを笑えないかもしれん」

「なんぞ？」

霧子が唐突な椎奈の言葉に戸惑う。この日は春のうららかな日...というわけではなく。二人の片手には傘があてがわれていた。この日は雨だった。二人は気持ちホームの中ほどに位置するように、いた。

あの男子高校生も数メートル先にいた。

「いつも、あんたはわたしのことを笑う」

霧子はそう言ったが、椎奈は彼女の言葉を半ば聞いて、半ば聞き流して言った。

「私、ちょっと行ってくる」

「え」

霧子の言葉は聞こえなかったことにして、椎奈は行った。彼のもとに。

○

「よお」

「...」

無言が彼女らをつつむ。いや、この場合、主語とすべきは彼のほうか。彼は無言だ。なにしろ年頃の男子高校生だ。いきなり、過去にふられた相手に話しかけられれば無言にならざるを得ないだろう。

「よおってば」

「んだよ」

思わずっつけんどんな対応をしてしまった。いや、仕方がないだろうこの場合。なにしろ目の前にいるのは俺をふった女だけ。

「よおって言ってんだよ」

「だから、んだよ！」

「あいさつだ。旧友に対するそれ相応のあいさつというものだ」

「んだちょ」

彼はかんだ。かんでしまった。でもしかたがない。彼は男子高校生だ。

「なあ。知っているか？鴨長明」

「あ？」

「かものちょうめいだよ」

「知らん」

「ゆくかわのながれはたえずして…」

「しかももとのみずにあらず」

「知ってるじゃないか」

「知らん。リズムで出てきた」

「なんだよ。りずむって」

「知らん」

「なあ…ごめんな」

「あ？」

「私は勘違いしていた。あの頃色々と。色々と、素直になればよかったんだ」

「あ？」

「すまん。私の戯言だ」

あ？と思ったが、彼はそれ以上追及しようとしなかった。なぜか彼にも、彼女の言わんとしていることがわかったような気がしたからだ。

「鴨長明、知ってるぞ！あの屋台みたいな家に住んでいたじいさんのことだろ！」

彼は、なんとなくだけど、あの数名のスーツ姿がまばらに見える、あのホームで叫んだ。

「そうだ！」

椎奈だって、彼に違わずだった。これはもう若気の至りここに極まれりという他ない。

霧子はそんな二人を見て「ばかだなー」と思った。馬鹿である。

○

春の雨の日の午後。椎奈はちょっとすっきりした気持ちで霧子に言った。

「諸行無常というものも、悪いばかりではないかもしれん」

「なんぞ」

「時の流れは悠久ということだ」

「はうー」

霧子はうなだれた。

それを見て椎奈は霧子はばかだなと思った。

でも、私も大概馬鹿だな、と思った。